

## 《嘱託研究員特別公開講座》

ウィリアム・モリスと書物の芸術の きらめき 燦

大阪大学大学院文学研究科教授（美学研究室） 藤 田 治 彦

## 1. はじめに ―現代美術におけるウィリアム・モリスの影響―

2014年の冬、ロンドンのトラファルガー広場の北にある National Portrait Gallery（国立肖像画美術館）で「Anarchy & Beauty: William Morris and His Legacy, 1860-1960」と題されたウィリアム・モリスの展覧会が開催された。日本ではモリスの展覧会のタイトルに「アナーキズム」や「無政府主義」という意味の「Anarchy」という言葉が使われていることを、少し意外に思われるかもしれない。ここでは「無政府のユートピア」「体制や権威的なものが存在しない社会」をもとめたモリスという人物をあらわす言葉として使われている。モリスは1896年に亡くなるが、この展覧会ではそれ以降のことも含めて展示されている。



図1 「Anarchy &amp; Beauty」 展会場入口

図1の写真はこの展覧会会場の入り口を撮影したものだ。左にパネル化されているのは、Socialist League（社会主義同盟）のモリスの会員証の拡大図である。ここには鍛冶屋の職人のたくましい姿と「ハマスミス・ブランチ」という文字が描かれている。「ハマスミス」とは金鎚を持つ鍛冶屋ぐらいの意味があるのだが、モリスが住んでいた街の名前である。この二つの意味を掛けて、熱い鉄を鍛えるハンマーを持ったスミス（鍛冶屋）の姿を描き、社会主義同盟の会員証はデザインされた。

この展覧会の入口近くでは、イギリスの6人の代表的な芸術家や文化人が、モリスをどう見ているかを紹介している。このうち、ジェレミー・デラー（Jeremy Deller, 1966～）というアーティストに注目したい。彼は元々美術史を学んでいたのだが、理論を越えて活

動の幅を広げ、今ではイギリスを代表するコンセプチュアル・アート（概念芸術）のアーティストとして活躍している。そのジェレミー・デラーは、モリスをこのように紹介している。「ウィリアム・モリスは極めて興味深い人物である。彼の主張というものは、いかにもイギリスらしいものから、革命的な政治のなかでも、最も革命的なものにまで及ぶ。彼は何事においてもすべてを妥協せずに行った。彼の人生のエネルギーと一貫性は、その他の人とは比べものにならない」。

ジェレミー・デラーは、自分が練った構想をもとに様々なアーティストに制作を依頼するというスタイルで、いくつもの作品を発表してきた。2013年のベネチア・ビエンナーレでの展示<sup>1)</sup>で、彼はモリスにまつわる興味深い作品を発表している。巨人ウィリアム・モリスが、現代の世界的な億万長者ロマン・アブラモヴィッチの豪華クルーザー「ルナ号」をベネチアの運河の向こうに投げ飛ばそうとする様子を描いた絵である。その「ルナ号」が運河に横付けされ、そのために周辺は警備で占拠されて、一般の人々の通行を遮断してしまったことはベネチアでは有名な話である。ジェレミー・デラーはこのことを批判する絵画に、社会主義者であったモリスを登場させ、金権政治や一部の人々への富の集中に対する批判を行った。

翌2014年のベネチア建築ビエンナーレでもモリスをモチーフとしたイメージが大きく壁に描かれて展示された。このように、現代のイギリスでモリスには過去の人としてではなく、いわば現代に生きる人として、再び注目が高まっている。

前述の「Anarchy & Beauty」展と同時期に、イギリスのオックスフォードにある Modern Art Oxford でも、モリスの展覧会が行われていた。National Portrait Gallery が非常にクラシックで権威的な国立のミュージアムであるの対して、この Modern Art Oxford は市民が運営するギャラリーである。ここで行われた「Love is Enough」展は、ジェレミー・デラーのキュレーションで、ウィリアム・モリスとアンディー・ウォーホール（アメリカのポップアートを代表するアーティスト）の二人の作品を展示している。エントランスでは両者のイメージをモチーフとした壁紙を左右に対峙させている（図2）。「Love is Enough」（「恋だにあらば」あるいは「愛こそすべて」と訳される）とは、モリスが1872年に著した長編



図2 「Love is Enough」 展会場入口

物語詩集の題名である。現代ではモリスは、デザイナーや工芸家としてよく知られているが、彼が生きた19世紀にはイギリスを代表する文学者、詩人として知られていた。ジェレミー・デラーは、「今日の世界の芸術と文化を考える上でウィリアム・モリスとアンディー・ウォーホールを抜きにして語ることは困難である」と語る。二階のギャラリーすべてを使って、「Love is Enough」という展覧会を行ったが、「政治、美学、ビジネスに関する、また様々な彼らのイメージに関する思いがけない重なりを提示し比較した」と解説している。ジェレミー・デラーは、この二人の芸術家の時代を超えた類似性や芸術に対する考えの興味深い重複を、説得力に溢れるかたちで示していた。

## 2. 書物の芸術家 ウィリアム・モリスの初期作品

モリスは22歳の頃、仲間たちとともに同人誌『オックスフォード&ケンブリッジ・マガジン (Oxford & Cambridge Magazine)』を刊行した。亡くなった父からの遺産を使って、1年間刊行を続けたこの雑誌は、文学者であり書物の芸術家となるモリスの出発点になった。

ブック・デザインの構成要素としてレタリング (カリグラフィ・文字)、イラストレーション (挿絵)、イニシャル (頭文字)、イルミネーション (彩飾) がある。いわば夜のネオンのように、本のページを輝かせるために施されたイルミネーションを、私は「彩飾」と訳している。モリスは中世の写本にヒントを得て、すばらしいイルミネーションを作った。図3はモリスが初めて作ったイラストレイテッド・マニュスクリプト (彩飾手稿本) の試作

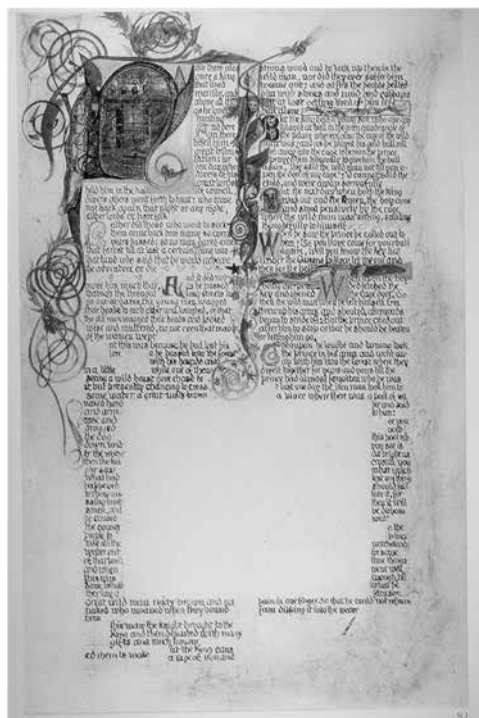


図3 「鉄の男」の彩飾手稿本の試作頁

である。モリスは『グリム童話』の「鉄の男」を英訳し、羊皮紙にレタリング、イルミネーション、イニシャルすべてを自身で施している。まだ最初期の拙い作だが、興味深い。

イニシャルの「N」の文字のなかには、「鉄の男」の物語の一部のイラストが描かれている。下の大きなイラストレーション部分はこの試作では空白のまま残されている。イルミネーションには、渦巻状の文様が施されているが、これはノルウェーなどのバイキングの組み紐文様、ケルト文様に近いと言える。イルミネーションは左右二段組構成の間にもしみ込んでいる。興味深いのは、ドラゴンに並んで、ひげ面の男性や女性、若者の顔が描かれていることだ。このように頭部だけが胴体なしに描かれているのを、ケルト美術では「切られた首」という言い方をする。キリスト教以前のアイルランドの宗教や、ケルトの遺産でもある教会などでは、首だけを壁面に浮き彫りとしてあらわしていた例があるのだが、これはそうしたケルト美術の「切られた首」に近いものである。イギリスを代表する文化人、芸術家と称されるモリスだが、民族的にはケルト系でウェールズの出身であった。この最初の彩飾手稿本には、その血筋にも関係するケルト美術的な要素が多く含まれている。

### 3. 中世の写本とテキスタイル・デザイン

モリスというと、壁紙やテキスタイルが有名である。彼は最初、「格子垣」、「雛菊」、「果実」という3つの壁紙を作った。このうち、「雛菊」の絵柄は、『フロワサールの年代記』という中世末のフランスで制作された彩飾手稿本の一葉からとられたと考えられている。図4の挿絵は、王や後の前で野人に扮装した貴族たちが踊っていたところ、衣装に火がついてしまい大騒ぎとなる場面を描いたものである。モリスはこの背景にあるタペストリーのパターンに興味をもち、「雛菊」の壁紙パターンをデザインしている。また、モリスのテキスタイル(刺繍)のパターンのいくつかには、この本のイラストレーションがもとになって生まれているものもある。



図4 『フロワサールの年代記』の挿絵(左)とモリスの「雛菊」のパターン(右)

『フロワサールの年代記』は壁紙以外でもその後もモデルの一つになり続けた。例えば、イラン系の重要な科学者であり文学者であった、ウマル・ハイヤームの詩集を英訳し彩飾

手稿本にした『ルバイヤート』の構成は、比較的『フロワサールの年代記』に近い。『ルバイヤート』では、文字とイルミネーションをモリスが施し、バーン=ジョーンズや友人たちが挿絵を描いている。モリスは協同制作の先駆者の一人とも言われているように、イラストレーションは得意な友人たちに任せた。

#### 4. ウィリアム・モリスの法則

モリスは、本のデザインは見開き全体ですべきだと考え、余白のあり方を追究した。そして、『詩の本』(図5)のような余白のレイアウトを採用した。内側の余白を狭くして、見開き全体で構成している。また、天、小口(前小口)、地と、余白が徐々に広がっている。今日、このレイアウトは「ウィリアム・モリスの法則」と言われ、出版業界では広く知られている。



図5 『詩の本』

この法則は中世の彩飾手稿本にも通じている。中世において写本はとても貴重なものであった。人々は数少ない写本のページを捲り続けたために、小口の部分は汚れ、摩耗した。また、聖書や福音書の写本などには、敬虔なキリスト教徒が、重要な聖像を描いたイラストレーションを汚損から守るためにページ下の地の部分に描かれた小さな十字架に指で触れたり、口づけしたような跡が残っていることがある。このように中世の写本は、ページの摩耗や、汚れを防ぐという実用的な面からこうしたレイアウトをとっており、モリスはこれを自分の彩飾手稿本を経て、ケルムスコット・プレスの印刷物に引き継いでいる。

#### 5. 私家版印刷工房 ケルムスコット・プレス

モリスはモリス・マーシャル・フォークナー商会という様々な装飾や、デザインを手掛けた会社の運営とともに、1891年にケルムスコット・プレスという私家版印刷工房を始めた。ここでモリスは、営業的な利益は度外視して、多くの美しい本を作った。

『ルバイヤート』(図6)は、モリスが手掛けた彩飾手稿本のなかでも最も豪華な物で、

金装飾などがふんだんに使われた、まさにきらめく彩飾である。また、『トロイ物語集成』（図7）はケルムスコット・プレスで印刷された刊本である。どちらもウィリアム・モリスの法則のレイアウトになっている。モリスは、先述したように汚れや摩耗といった機能面以上に、中世の伝統を自分が引き継ぎたい、自分が得意なパターン・デザインをその部分で発揮したいと考えるようになったのであろう。



図6 『ルバイヤート』

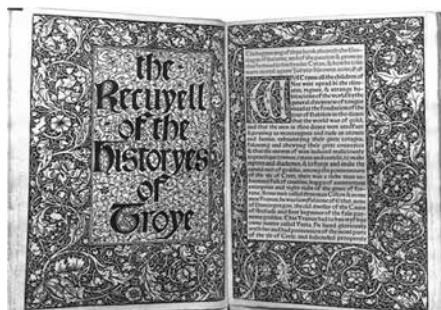


図7 『トロイ物語集成』

## 6. モリスの自宅「ケルムスコット・ハウス」と私家版印刷工房「ケルムスコット・プレス」

図8は、ロンドンのハマスミスにあるモリスの自宅ケルムスコット・ハウスの写真である。ケルムスコットというのはテムズ川（写真手前）を遡った源流近くにある小さな村だ。この村で、モリスはマナー・ハウス（領主の家）に匹敵するようすばらしい造りの農家を見つけ、その家をケルムスコット・マナーと呼んだ。しかし、ロンドンで活動するモリスにとって、遠方のケルムスコットは別荘としてしか使えなかった。そのため、ロンドン市内で別の家を見つけ、1876年頃より住み始めた。モリスの理想の建築であるケルムスコット・マナーへの想いを込めて、彼はこの家をケルムスコット・ハウスと名付けた。<sup>2)</sup>



図8 ケルムスコット・ハウス(左端の建物)

現在、ケルムスコット・ハウスの半地階はウィリアム・モリス協会の事務局になっている。<sup>3)</sup>ここにアルビオン印刷機という手刷りの印刷機が保存展示されている。19世紀当時、

既に機械式の印刷機が広く使われていたが、モリスは手刷り印刷の高い質を常に大事にし、中古で購入したアルビオン印刷機を導入した。さらに、モリスは活字も自分でデザインしていた。「トロイ体」、「ゴールデン体」、「チョーサー体」という3つの書体<sup>4)</sup>を多忙な日々の仕事の合間を縫って自ら制作している。そして、ジョゼフ・バッチェラーという製紙業者に特製の手摺の紙を、ドイツのインキ製造会社に特製のインキの製造を依頼した。こうして、モリスはケルムスコット・プレスをはじめた。

ケルムスコット・ハウス周辺には、書籍作りを専門とする様々な人たちが住むようになった。隣に住んでいたのは、コブデン・サンダーソンという装幀家である。彼はモリスの思想や実践に惹かれてここに移り住んだ。<sup>5)</sup>近隣には、エマリー・ウォーカーという印刷の専門家も住んでいた。エマリー・ウォーカーがいなかったらモリスのケルムスコット・プレスは成立し得なかったかもしれない。モリスは彼から様々な印刷の技術や芸術について学び、実践した。ケルムスコット・プレスの成功は世界中に影響を与え、アメリカや日本でも私家版印刷工房が設立された。ハマスミスのケルムスコット・ハウス周辺は本の芸術のコミュニティであり、また、私家版印刷工房運動のゆりかごとなったコミュニティであった。<sup>6)</sup>

## 7. ケルムスコット刊本

最初の刊本が『輝く平原の物語』(1891年4月4日刊行)で、次に『おりふしの詩』(1891年9月24日刊行)を出している。翌年には、若いモリスが最も大きな思想的影響を受けた人物ジョン・ラスキンの『ゴシックの本質』(1892年4月2日刊行)を出している。『ゴシックの本質』はモリスが特に愛好し重要視していた本で、モリスが中心となって1877年に創設された古建築物保護協会の思想の基本にもなっている。図9はモリスの小説『ジョン・ボールの夢』(1892年5月13日刊行)の見開きである。有機的な植物文様が基本となっており、他の刊本でもこのスタイルは多く使われている。このイラストレーションに描かれているのは、「アダムが地を耕しエヴァが紡いでいた時、ジェントルマンたちは何をしているのか」という、革命的、社会平等主義的なモリスの思想の一部である。



図9 『ジョン・ボールの夢』

モリスにとってのブック・デザインの本質は本の中身であり、外側をきらびやかに飾ること以上に中身が大事だと考えていた。ケルムスコット・プレスの金字塔と言われる大作『ジェフリー・チョーサー作品集』（1896年5月8日刊行）（図10）は、豚皮にエンボス加工を施した特装版だが、デザイン自体は非常にシンプルな装幀であり、モリスのブック・デザインにおける考えが具現化されたデザインだといえる。

『フロワサールの年代記』（1896年12月24日刊行）、『Love is Enough』（1897年12月11日刊行）、『ケルムスコット・プレス設立趣意書』（1898年3月4日刊行）はモリスが出版準備を行ってきたが、残念ながらその死後に出版されたものだ。1898年までにケルムスコット・プレスでは計53点の本が作られた。部数は一万八千数百部が印刷されたと考えられている。現在、それらの多くは日本を含め世界各地の大学図書館や公共図書館、個人のコレクターによって所蔵されている。



図10 『ジェフリー・チョーサー作品集』

## 8. モリスと建築

レッド・ハウス（赤い家）は、新婚当時のモリスが住んだ家である。モリスの親友の一人フィリップ・ウェップが設計し、1859年に建てられた。現在はナショナル・トラスト（世界有数の歴史的建造物並びに自然環境の保護団体）の所有物となっている。ナショナル・トラストは1895年に設立された団体だが、モリスたちの古建築物保護協会は1877年から活動を開始しており、世界の歴史的建造物保護運動の先駆けとなっている。

さて、レッド・ハウスの写真を見ても分かるように、正面はあまり正面らしくない建物である（図11）。欧米ではファサードという考え方があり、建物の正面は立派に外装される



ことが多い（例えば、レンガ造りの建物だが正面だけは大理石造にするというような作り方をする。）モリスはファサードという考え方を重視していなかった。このレッド・ハウスは、赤レンガ造りで左右非対称である。ロンドンの北、ウッドフォードにあったモリスの父の家は非常に立派な左右対称の白い邸宅だったが、レッド・ハウスはそれとは正反対の造りである。このレッド・ハウスを、モリスは親友のフィリップ・ウェップと相談して建てた。

レッド・ハウスはモリスの家ということでも有名であるが、それだけでなく近代的なプランニングの家ということでイギリスの住宅建築史の観点からも重要な家である。デザインはゴシック・リバイバルだが、平面計画上は非常に近代的なものであった。一階と二階の窓にはステンドグラスが施されており、「Si je puis（もし私にできるならば）」というモリスのモットーの一つが描き込まれている（図12）。一階のステンドグラスに描かれている動物の絵は、建築家のフィリップ・ウェップが描いた。このように、赤い家は、モリスとモリスの友人たちの協同作品であった。このようにしてモリスは、モリス・マーシャル・フォークナー商会（後のモリス商会）という近代デザインの先駆けとなる様々な活動を行うことになる、設計施行共同体を作るようになっていった。



図11 レッド・ハウスの正面



図12 ステンドグラス

#### 【注】

- 1) イギリス館で行われた「English Magic」と題されたジェレミー・デラーの展覧会。展覧会会場の入口に、巨大な猛禽類が真っ赤なレンジローバーを驚ぶかみにして飛翔する絵を展示した。この絵は、（スキャンダルを引き起こすことで有名な）イギリスのハリー王子が、絶滅危惧種であるこの猛禽類を撃ったとされる事件が題材となっている。王室メンバーのスキャンダルを、芸術作品として国際美術展に展示するのはイギリスという国の面白いところである。
- 2) ケルムスコット・ハウスとケルムスコット・マナーは、テムズ川で繋がっている。モリスは家族や友達とアーク号（方舟号）という小舟で二度テムズ川を遡る旅をしている。

モリスはそれを素材として『ユートピア便り』という小説を書いている。

- 3) ウィリアム・モリス協会は、元々はこの建物すべてを所有していたが、財政難のため上階は売り渡してしまった。
- 4) 「ゴールデン体」は『黄金伝説』を刊行するために作ったローマン体である。「トロイ体」は『トロイ物語集成』を刊行するために作ったゴシック体で、「チョーサー体」は「トロイ体」の書体を小さくしたものである。大部な『チョーサー作品集』を「トロイ体」で組んでは、大変な大きさの出版物になってしまうために、この「チョーサー体」を作った。
- 5) 隣人同士ではあったが、モリスとコブデン・サンダーソンの考え方は大きく異なっていた。コブデン・サンダーソンは装幀家として、非常に美しい豪華な装幀を施そうとしていたが、モリスは、本にとって一番大切なものは中のページであり、外側はシンプルに留めるべきだという考えをもっていた。
- 6) 私家版印刷工房運動、古建築物保護運動、アーツ・アンド・クラフツ運動のように、モリスは「運動」という言葉が常についてまわる人物である。それだけ様々な人々に対して広範な影響力をもつ人物であったといえる。

(2014 年 12 月 12 日、生活美学研究所本年度嘱託研究員特別公開講座における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学 横 川 公 子